

Y10a 明治20年の皆既日食を撮影したと思われる写真の発見その後

大越 治（国立天文台）

明治20年（1887年）8月19日、新潟県から福島・茨城県にかけて皆既日食が見られた。この日食は近代以降に本州で初めて起きたもので、新潟県三条で当時の内務省地理局観測隊の杉浦正治氏が撮影したコロナの写真は、世界的にも貴重な資料とされている。2018年の年会では、この皆既日食を非専門家である町の写真師が撮影したと思われる写真が、水戸で新たに発見されたこと、そして、当時の写真の役割と技法や撮影者について調査し、一般市民がとった多くのコロナスケッチと比較することで、発見された写真の一部は実際に日食を撮影したものである可能性が高いということを報告した。その後、撮影者の子孫の方を訪問し、ただ一つの遺品でありコロナ撮影に使われたと思われるカメラレンズを検分することができた。その結果、前回の報告の通り十分にコロナ撮影ができるレンズである事を確認した。ところがさらにその後、このレンズについて子孫の方に伝わっていた事ながら異なる事実が新たに明らかになった。果たしてコロナを撮影したのは本当にこのレンズだったのか、あるいは別のレンズが使われたのか、再び混沌とした状態に戻ってしまった。講演では、問題のレンズについて新たに出てきた問題点と、その後の調査によって判明したことについて報告する。